源氏小々見二

給ひし文をとりかへして給へ
のたまへとも御文はかへしてひとりつかひわ
つまられそへしたりつゝひ
いやしきやまひのとふらひてし
つみひなきはさうなかりけるを
うれしきいせたのあさとなりひるま
りかさうてこふに御のうちにて
文をしてもて御覧まさくへのふ
事なりけるとて
ちきりつゝ○とうみ
文をかへしまいらせよ文奇そ
見えたり

いせし国
しかひのうた
うきめかる

なりひ屋き（云ねにくすみちの）
ゆふひなきつり身
いせたのあま

これは文と和の文ありし弁のことなり
まかくてその弁もくれぬつきのよし
の書のこゝろくまをひしあふひの上の
あまのとう乃中ぬのうんしを国へうつさ
をひしよりはあさゆふ悪うなしをてく
れよのそしつまとも志しをふれはふ
あうらとてもいくせんとなりひて志の

源氏目録巻之二

六

七

八

九

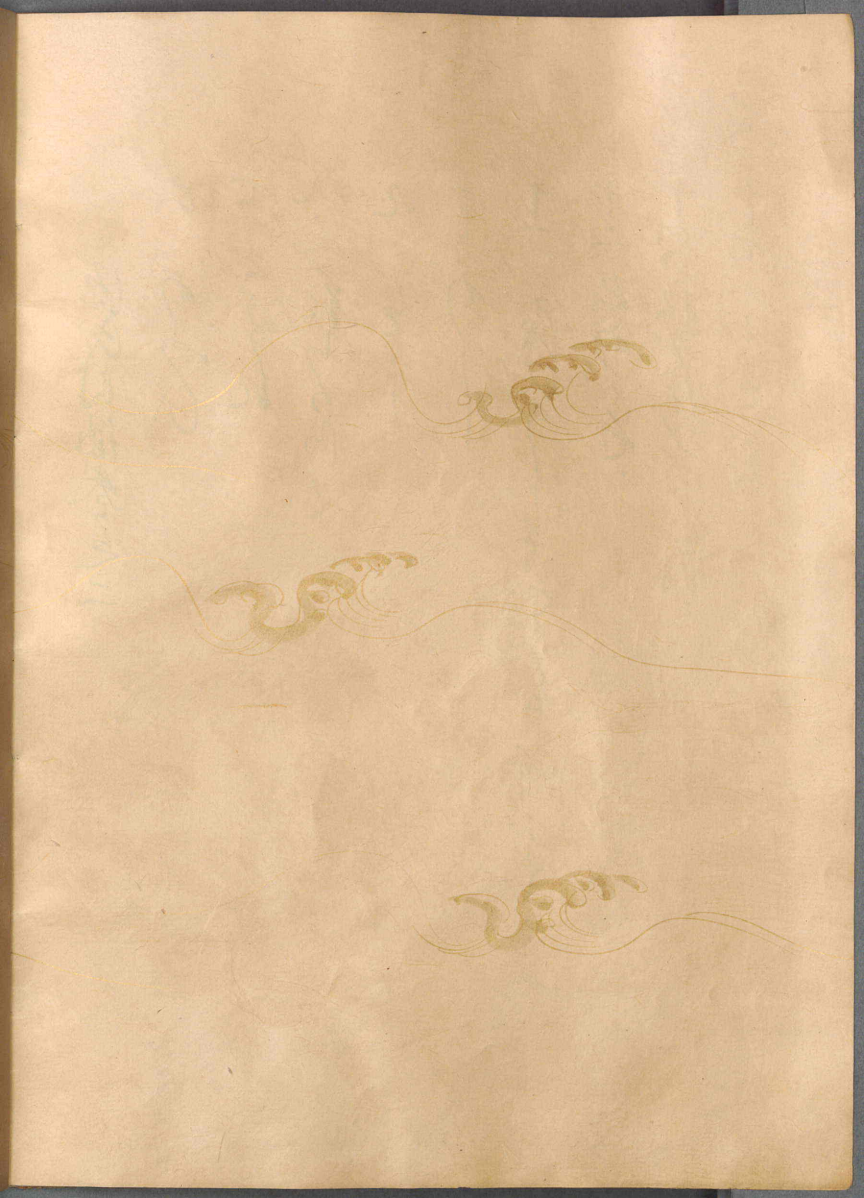
十

十一

十二

十三

十四



云 あつひ

此事あつひといふ事一の事まなんし十二
まなく元服(げんぶく)その事なり為りてひさへの大
臣のむとまなりてなしまれ此のうをを
もあつひのよといふ此事より源氏の所ある
朱雀院(しゅしゃくゐん)の一所なりの姫宮かものいはさに
それなりすふ所もとる源氏はその所大ぬる
て此うまつりすふそのうしれいうしさ
所とまて人々目をおとゞ給ひと此所のさ
その所なきりの大ぬとをしまてあり

めゝなんぬゆゑてこそありしくおほし
まやれんなくいとゝみえて出くはなん
すゝよえなんしかひのみ云峯のさやま
あまさのひて出たるよ御車のみえてしとゝ
ゆとゝものゝへあつそひてさやうとあの
御車とうちさんしあそたり車あ
らそひといつつされなりかものまつり
のまうれはあふひのまとしつかはなく
しくみゆけはなりてそのまつよ八月よ
あふひとよりまうてさはやうにあなんし

ちのひきうつしてこれはかんのうへも
しやうひくふくれなさよかきく
なりけんとのことをつゝさと物かわ
かつうちらかきしく事さへあきらお
りひよちうてものましなりけれは
つまらんしつよくうらうしかきくに
成ゆくほとよ人ともせとをうしとて
ひとりとめの姫宮いせの斎宮よ下向あ
つましよひさはきて伊勢の斎宮よと
そうらうふ伊勢のうちやらた和しもつたし

こたことに

あらそひの車　称さむ

ちかね　うとなるね

なといふはじこやと下のうなり旬にたて
ふくはくへしみかりの祭にかゝそれと
いふまあり竟はまつり日しらはさの上
と一車にて御覧しに出すふかはくしの
打そしなくはんさきてまへはおよそ
のちかせりとれとこそ御ひてしさ
きの上の御りしと源氏そうせすふかりの

まつりふかきそれといふことをいられと心
得しかくしそきこそてしる弱といふひ
て御前なんしよそ語ふ
そかりなれる弱れたこのみなさの
おひゆくを思いまれのそそ見ん
とよりんまふけ再るむしらせ
るひろともいかくかあるんさきめなく
みらひろしかのれとけうらぬる
也とよりん語ひしなりうれるのき四月祭
前のまつりとそ見んあまともいひしかあれ

はるなしとひきわかれやくしこえり
そくにへしるはとよかのおひのう
九月日かさなりて御産ちかくなりしや
とみのかんはうかんなまほうかと
ろうなうんやはなやと大事にてかゝり
のはなまほさ風くのいおりからたき
ひ承りへしそのおりさやとちをのりいろ
みあ逃このおもひのうへのはしきも風
さらさまうにうしの香さやとみる
はそうりおくちうしこて花をたかり

ゆつきりん

それさてとうくしてワうきりん生れなを
まふこの頃とのれて海つくしまいふか
さりなくよ海らひのしほみなへく
をうら屋をしてすこして海ゆきてワう
きゝ乃ゆりてなしよ日とくるゆと
よれうつやよ女日ちりありてれたく
あつひのうへは井よかく生なまふかや
秋のらりくなれはきんしのさゝもちれ
かくしも閑へまつりをまふこれそうなり
なりまつ面りりまきんしかたしほ

てこゐくとうらうらひ出すふまはの
よりもはめとまりてはんしとくり
まるとうやあれなりしこともなりと
もてくりまて入すふ内へつけ者こゝぬきは
そのよれ除目(ぢりく)も有つきぬわしとそこふて
うつりまてまりひぬきともかくれひまとうち
らひうるものゝけなきはうひあるんや
(じえりんしのはとそこうりつかのつりと)
あしうるく云りんしのさゝろはんはうら
わりひ有りへし八月十五日の事なりとも
しや生うつりまつてはなうしかりまてと

さゝてまつりたまひつゝゆく事
のこわきてのひたくしてゆ井
まうりへのへさくつきてそのわきの風とい
ひとり孫　かうんのこゆきうゆす
ちのすこさこのす　世はあれゆて
たんしつくされまふ
こ院はうれの義して此院林のさうき
うゐなりふ付すへし同十九日すまて
ワけとの二てうのゐんへうつりふ九年
十二とりいまゝいけふりし同様より

そしすこれきをひしにおのうさかくき
詣へもなふゆへまゐ大臣の御りとよを
見てまゐへきなれいつ君とはしの
りとゝめてまつりてまゐとのへかり
まゐおりかしのあるかさいるんかさそか
き十月のまなきは河面かりあきて
いまゝろ御なうこをりしかとおかいと
のとゝしめそてまつりく日しつ交
はりへなかし毋屋なしんおさめ屋ら
と袖としかり源氏の君もそらさ

つまさく御名こそかすくにれわりゆし
なりさくかうり給ひくしさくさし
うらみ給ふことへつりまするくしの給よ
つらしくさりりよ給ひとくのひてうつ
きらしくみんさくかうしけむささくれ
よ十九にらしくりまてそこて給ひし
かうしもいまさねさうくあらし御ことこれ
姫君もなんしのまゐねとねりしうるとい
ゆめくありしもちてられりしよ
そのゆうしは十五ある本しそれのよそり

新枕ありてはきれ取きんしの器りれ
これこつとめしてのくまふ事ありこま
ひいおれこのいたひなりあとれ取かや
のもちいうとくまありて（らて）きくめて
まいるやうとおりやはくこれこつうを給
ふりて称のこいつく給りつうまつるへく
ゆるんとひやしうもゆんし三ヶ一り
てあるんかしとの給へいんえく立ぬ君
りのなきのものやとこ生ふ門と心ま
さりしてたりしめしぬ是ホハりしから

ぬひじとやしをちりとけんはま井枕ぬ
乃日つきのよゐ日にて三日のよう孫の
日まわたまり大きく男女のわひそあく
三日の夜はやんくまいたふなれはいまひ
もへきりわつひのようきまひて帰り
まひそりわかしなれはことく夫人の
ありつへきとをくりてことさうりの
愛してこれこつり思ひ屋るの給へり
そきをんえてなふとしひそてまつ
るへきなし○も孫のことしひそてま

にゝ三ゝ一とは三ゝいと一せんよりへてにゝ
ゐくらりしとくいつきやくつるを
なれいましきいりは三ゝ一とてあん
しとの語つりおりしろりしにゝから
そうし極はさの取るてくらりてま
いり小納言ゐめれとせしいしきれの
上のにゝめのとなりそれいおとりしをて
ゐりしをやおりしめとへきとおひ
てしきめゐ弁の君といつをとひく
と申せたりつきのあしきとりつるを

めりかしはめれとなしきりくはんさ
の色をあらきにもめくそくをこそ
おりひそれそのりのことも

三ヶ一　みかれよのりちゐ
孫のこ　小井きくら

これらいちさりそめしなくいふ句よはく
なしむしされの上はし夫のこゝろ十
月なんしサ二のはしなりしくく
ゆえへし

七 榊（さかき）

はまさうれといふるは奇ま六葉の文を
とらう

榊うれはちうしのとれもなさりのを
いうにまうへくおわるさうれを
ふはあつひのよのまをりやしうる六葉の
文を取のひむをめのさいくうりいせ下
つまくまふりまつきよまりしての文
よをまふ取へさをうふますれをもて
をうれなりいせしてありをふなうり

もおしまゐりくとろ九月七日八日の
夕月夜まれ屋うまさし出くよ海川相
あまれりて松間めし出くあしろ乃
くおきの志のひやうふうら屋つきそう
乃ましくかの程乃笑へうんし寄り
うひて明鏡んしうれいぬ井めれそう志
えうれと大うれましてをろ末のとり
井うさひてあさらう原もうれくま
喫しかきろ松風方ふしうんくしの
こともまうひりのとしそしくまを

てひさうやうりかとうふく人をみさう
きしれもせをこうよそのかりしを
人のをみくさそおりひのこを事かく
かんをもんとよそさてもひ居りし
よりあはれりてこのほとれとそれとを
まれううらめしくおりしくほまへの
柳をつくりかしやひてみをのうらさし
つきておうりなとしまふおりの哥
そうしそのゆへよさうれ此をとりしさそ
ほまくのおうりあつけきをくなりし

これさたのみこの家の哥

秋の草木く　山のと

ゆふされは　まこれ

ことは木の為君　野への霞

松山　わすらるゝ

あきされは　風させなく

いやまして　こかは八十瀬のは

寛平の御時いせなしらり付へしいふかし

桜の花おもしろかりけるを見てのゝ移と

いせりかへて付ありし桜院のれんなやこ

神無月に成ていとをりくけれは此門
十一月より初くまさせをふきたり源氏は年
よられて相うくれ初しめして是より
夜(ひる)の間よてもしつましく成ゆきて日
侍ひとのことをけれはあらわれて後
ありすさへなりされはふけ事けれはあ
きもとていせるとり付へうと相に
かの此門いつきのれは崩(かうぎ)なりもの
所ゝんなと人のそうのんにしてるんは
しけなれは事しなり

八 花散里

けさうれちうたいゝすゝ
をちかへれのかをなつかしみ
をれちるさとをたつねてそとふ
こゝ斎のゆへなりけん中川の
わたり人のひとおほつかなく道にて
ほのかにかたらひしかきねに
の斎とゝまて入給ひしつりそれて
五月雨の空まれなるにはれ
をちかへれ 御とのかきね

九　源亠

こきはらうしにあはれに菩薩院にくらゐ時
まるのえんにあひそめしおかる月に
のかねのきこしれいのうしはめん
まふきらしのきとらんとうのきさ
やしてらのいきく大にれ臓ちきひ
くあしきひまはよきひまへのうた
まつはしら源二しんはふなり法い二月
廿余日なりそのしもく
りくわんのうしわん　おりやせう

こゝろくれの雨新さかへゆくらん
あけさけくあか月
これは源氏へあはしきのあはれなりしこと
さのうり此花あはしき源しはかりの
こゝろなり雨ことゝはりことのまうりさこと
えたてりきめはさなくよりなり
そてこ文ゝよなりくりそありそ
こゝのなりふらこなたうゆなく
ありめてくとこいりりとめれ
よりのとおゝもなりりよ月

の月日とうけるへきにまうれなら○いせん
うさなくおりしめし三月三のふるに燒た
いふよりぬてひんかさのすてはしろ乃
おりひよりおりやせのへまれなるみ紛
らとうけくしをおりしてこのかけの
屋うまや屋せてゆるわれなるわさる
とのさまへはとんなきこなうさとひと
め　うけてみんとこせゆるいとしのひ
うし

月はくてさすしへぬとしあるわり

きぬゝゝのはかなきありし
とらんすひしせすせらんの上
まれてもうけりはとさうあなりい
りんとさてしなくさめてより
とゝきかゝしのひしことなりかさゝ
めりん上風のうれなくよ付さ給
まへし浮舟の君よそうりうき
車とへ御わ車おいおかへりに
なりされのみかいもひよこかりんの山
ろりさて中へまりまちてのんりし

つゆけうなりけり梅ちりへうつろひてしもやこ
ありひさくへかならたかにすみけとし
ろうらへしさしつゝ行平の中納言のこ
浦りなりけれてかしかれにまる
まんかとゝくきさ月とされなきさく
りとふさらくらしてやんことなか
くわかれなりかりそめのいほつきせ
もやしうりしかしわすれかしく
とりえきろひてまつのえしらそけ
のきつしのえしらたし庵うかうて

中くわりし河し庭の草をていさ
くらなとほりうへて時のかとゑんとゝろ
ありてしるさせまふそのかとのことゝ
わり来のさくら　いしのもし
そけのうき　れのもしら
これらは上臈のいふぬのしきなりしと臈
なりしもといふことはなりしかはしろ
の山よそつかつりとなふそとそけ
祢のへんしもといふ相わくつかつりな
ことはんしなれとめつらるれり

めしく

山かけのいほりまそけなきもしくも
こしひとなんこつつさと人
とよまゝ色をふりしかゝ面くそつりは面ふな
とはをさ色をふへし面うくなり面乃
こゝろりなりこれをも面まなり面といふ
こゝもなりふうへしやうまとりしけ
めて京へ門つかひとしてこの色をふ
とこゝろくの世ゆゑをふもいかゝり
うは門なきこりまかしをふこれなと

たふ御くしかたし相私もなりぬさ
らてたり私へものうき夕くれまんと
もまゐ御そひ孫のとゝおりひ御しん
うさなし家なりて子れまとゝかぬ
ひとり孫のよものわしとさしふ
もも段ちりとる立くるとらとも平
の中和立のせきふれうゆるとよみ見
かりしのしあるせてなきかけとは
おほえ孫とも松うくちり也家右より持
そまひしきんとひきよせて御心

よひさすましきふ口きなうしをうくれ
しろくあれしくそのかとのしとん
とりちとり　月のかり
称さめのこと　ものわし
うしなるん　そちらくれなし

なみさまうく枕

これはいとなと海のうさす海井のしきな
まいかれも浮きまはうやことをひ志のふ
ふきひうさなうちしなとくつしとと
浮くなし柄もさうれの書り伊勢(かり)

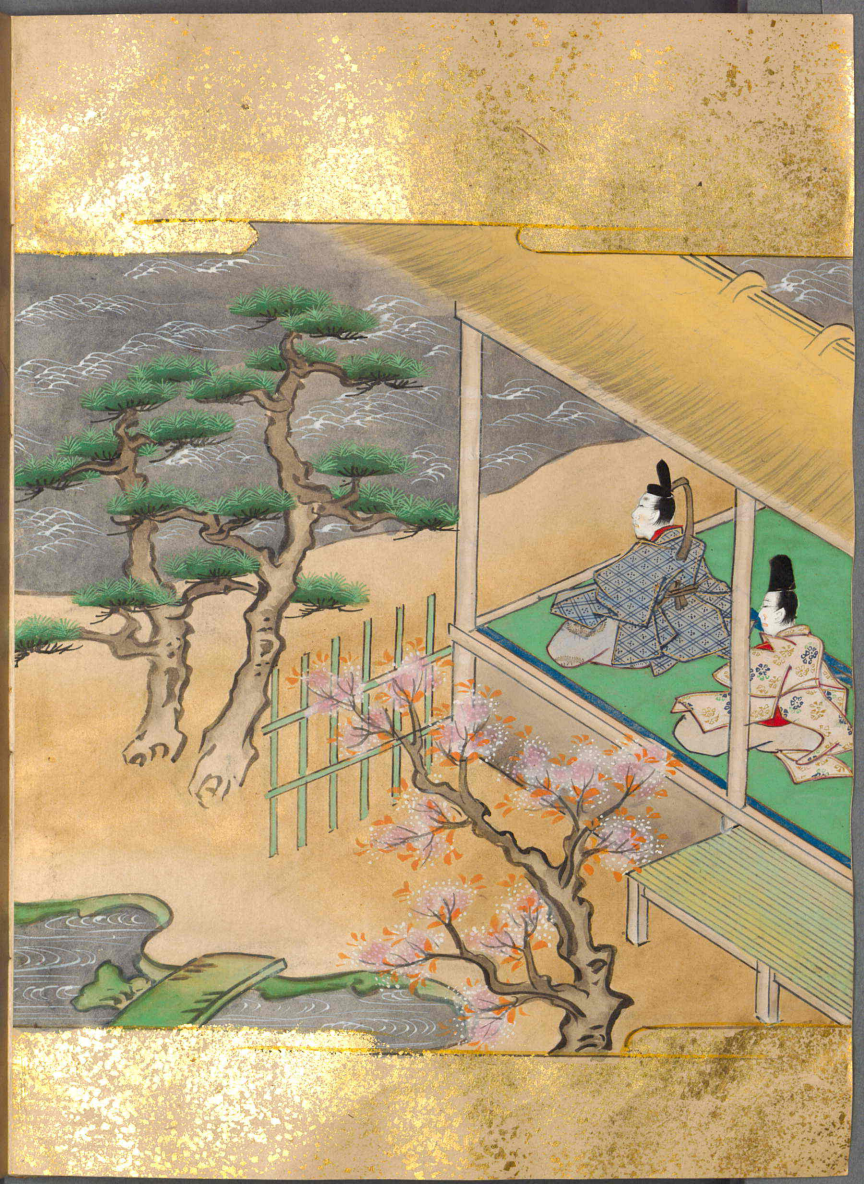
ひくれしてつよどまりて湯ましんがた
弄まさるも秋夜のきはなく〳〵かり
をみらんしなつしくめつりふてに
まさんとてくるこ風あなたしてそく
さつりするその花のしき
をのしなきて
雲井よりひとり
うたこ風ふと
なきさく
えれのさの川さし
これいとゝ世の中ぬのれしらて哉
乃事なりけるしくわうぬ君御覧し

こふらめよこゝろなきしものおもはゝ
ゆかしあはれなりしこときゝしは
こきとゆすりかてこそ年三月一日
この日のはゝへしはつんとて清水
海へ出てまふりきつゝふ雨風やひく
うきの色ハかはりとえりそろうし
その間しものゝしく
ひらきさ雨　人々
よんの日風さへ　大海原
さて夜ふくるまゝしてなきひの御門

あへかつりをひそれはなほも面風面す
とうえなりひらめきつくりをそろ
き事うさりなし日数を置くされは
こやこゝりまるくのはつかひも無のとれ
つまりきそかちてくれはひなし
いつまもへしはけひあしの事は
まんてそり哥も好なし事はありそ
の時しさきのよの文のはうて
うら風やいふかくらんかりひ面
袖うちつしなし面るれこそ

といひてきゝしりなりたるよくしり
ありしその事すらくしてかれ
ほのつらくり十二日まては雨ふらす
すゝうて十三日のあかつきにいさゝか雨
ふるしはしありてやみぬ女これかれ
なくこゑいそけりなしそのすこし
の船とうくさ舟くれのみあたり
くれいもあはしふ尾る風きたり
てのもみなりのなりかなりしうて
まうしもなくゆきまるひめするよ波の

けありちこゐん
にてをとりて
このうしさり
ゆへとのさまふ
なりされもゆめ
といふ事も
ゆくへ
し



十　明石（あかし）

はまとり源氏ぬきよりあかしのうへうつさ
ひまへはあかしのまとといふへしかの十三日
あかつきおきのうへむかひ夏さめて御
らんしありそれはちつき貴家まのりく
そりまゐされのうくしきりらこきとあ
かしの入道といふなりかれへのりとより東
門にてゆんしとよひそてまつりて御
むかひ家をとてまつりは君ゆめうつ
ありしめしあはせてさうなくこのうへ

うちひまへ道とほしといひしてまうて
きたりなくうつきそてまつそのところ
はひのすゑ　ともや
こひまうかと　かれく
うしはらひ　うちとち
こよひかへりまうてたひし筆かくて
都のかとほめのくさてたるところ
ときすらかはりてし面ゆゑとほり
やんことなきてつし池の面水かたれ
とほくなりなりにける里の池の松かな

けうゐらなといふこともあり事はな
まてはくへしこれは三月なり程なくは
月よなきはしろそ人の所にやうそく
御丁のうさひうへしろまてあるため
くまうゐきかりてなしうはさ
そてまつらは入道いうしをうしはを
むしめ一人りらうりこれそわうしさ
きのまとりわうゐ面れ形り小山まて
人をうりつしぬむしめなるは○よ
ゆりひらひとりこなしつくるは事

なりんぞんさせのみへしなんてなりしをお
もひしはさてなくなりんむとをも
としとおりふまかのひろかんしを面
りしけしをふをせていかりてうも
うもへうつしうつせてむとふとり
そてまつらんとおりふんをしみらの
神のあたはしやおりひかひかんとし月
すえよりしは初つ代しきを面してかん
しのけんしかんゆめとおりしあるま
かの入道も夏をつくとりあへしけむ

ひとまつゝやりされともいふしてかひ
出しへきとはすてとまらるそいとも
なけきからやしあるあれし故事
二条院のむしろさきのよれ事よりもの
うとくおりしかし出くおわきれ
も琴（きん）とひきまゝ入道そへ〇てきけ
ちやうのことをもらてまつりてすゝ
そてまつるよすうしひきすさひまひ
くこまは女房のひきそうこそあつかへ
しまれとのまひしことをそとより

このとうへの御と入道のむとめすまを
し和なりかやのりとりちとひさへ
そてとれさりさてとうくいひとりて
かよしやまふるりてかよしやまふまある
東部もらひしくかりしめしてけん
秋のよれはきけのこ国よりうふる
雲井とうけき時のまもらん
とよしまひしまりさてこそ月毛れこ
まみしいふことはありしふりし又あり
よろ国といふるありしいふともあるふ

なりしかばいかゝせんとて
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと
思ひまどひてゐたりけるに
ものもいはでなんとせんと

ありて
みねこしてましなはなふさとしめや
としつつしとしおほつわさ
とらんのひてなく都へのかりなかの
しらめのうろふらありいなるへ今ゟ
もたなくらりありしみそてまうらいま
てにとくりよきうきんしもこく
わられよみんとてこく君のられて
とこらとらへんこあかのつんとみ
なとうめしくありしきりもめしの

らくとうきゑひのすゑ井かわらにはか
まといふ所になかりしとやすまんと
ありしくへのはらりまゐられしあか
しみてせられきとのはしあひ
よねゆめとしてみくゆりつきうる
ふほとつるりとあひゆゝ給と
のしまいて御弄けり

あかくしもつをなりけりうもの
みろめいあまのをさひなれし
とよみてとりのひしなりきれとと

ことかたりといふなりしとさにのうへ
うしなくしたりひきうゐちさりしを
まつりなとゐえしおそと
此所ことをとり
わるせてはを
させりうへ
し

十一　漂漂　こをはくし

はまをとこははくしといつまいは
うとなしてなにのともひなれは
なふこをはくしおもひそめけん

此奇ゆへなりまんし都へめしうつさまく
用となくりしのはくしかまわらくまり
うとなりおれ桂大納言よなり内大臣かを
まふいこしくさうへまふりしよと思ふて
かこなりおちうりなる事のはゆめれさ
としもはかくすみしの神れはちう

ひとかりしく秋のこゝろをみしへ年り
まふ秋つかのあしのはさもちる秋こ
とふおさなくしりはわやつしまてを
みしつきつすゝまこゝろもとを
目ひいしき所まて年まふをもしを
しくあしらりもまつりそれは私家
のあるりは御車をてはきくいし
きはきれをそれをつりまふをとか
ふをりはあさしとあ屋をひとも也
法人は目乃かとし年りまふといへはとん

らりもろうしく数ならめかとおもひ
てなふてのこゝろへらてかろくへと
するはさのひなりは人さてやられなきいの
けんさりうこゝの東宮ちく年り
てくとかきれいきひのきてしくら
すゑひのよけれんいなか許は
もひのきし宮こゝもなかふすら
こ成のしてしあんとあり
とつ弁のんとのゝきひうかりけり
あめとてはゆふこうしくりうつれり

ゑしうれ菴にとくつき出して此車の内へ
そてまつるそとうかゝりまんし
と候にしあつるしふらまてと
めくりあひぬるえまはゆしか
とよるんてか乃に毎よりれうてされたみ
とにくしといふるはとみよりめくりあ
ふなふもの毎なといふことを付へし
さてけまをよあしれうへは姫兼三月十
六日よりうをそてまつり給へは京より
御めのとくさうるそのことを

いるのをひきれ　いり六月四つ五十日以いこ
ときそもなれけ　あり
これらハかの姫君のうまれ給ひし時の
の事と
うろへ
面し

関屋　ことはしのなしひ

はまをせきやといふるなんし石山へまいり
まふりせき山まてむしうつせきと受
えし人のおとこのいよ所ひそらの関司
まなりて下つらしかなりて後京へ
のほりりせき山まてあひ給ひしか
ゑ人しきらむしの事をかりしめ
出て石山より出まふ所じ人まこさ見
まいわりしのひてむしの所ふしの
こゝをめしく所ゑわりをこゝ

せきや　志水　ゆきわふみら
志かなしぬうゑん　せきとめかてき淑
そのかりのことをなりこれをとりあ
せいし山せき山なとふ付へし
もくらゆきわふらをなのしも
なほかひなしや志かなしぬうゑん
ゆくゆくとせんとめかてきなみさや
みさしぬしけと人にうるゑん
まんしまいり詩ふうつせきは初へ入ぬきは
ゆくとくるとのんなりもくらせは

蓮生（よもさふ）　こをつくしのなしい

いまそよもさふといふるはりしくれの
まさのなしいすしつむ花のまそよみて
そりゆんめさ行くるあうさ女房そ通
なりしはひさちのこやの門じとめて
し源氏あれはて三ちし三ちしや語
なしもと函のそりいめなとよれり
めしもうとへさや語りを門きしちこ
やの門わしの門きしてしと門ふとこ
くいふうさりなくかすりなら門すまぬ

ゝてすゝきのひゝとすゝきのうへに
きりぎゝすなくこゑのいとゝあはれ
なるに月のいでゝ
ゆくゝもとゝまるゝもなごりおほ
きの露のうへ
にしてこゝろのうつるこゝろ
おもはるゝ
きてひとりのゝやとにたゝずみ
ゐたるに
おもしろきあり
のいとゝをゝ
ふるさとをゝもふ
ゝ
しうをてにとりて
ひとりのゝしるし
ゝ
ゝ
ゝ

くゝ御くろもなりして二三年あ
まく二条のおんひしのそいふよろ
してやらしそてまつりまひしまり
とへく御心ゑくなふくらいさしいて
まきこゝいてき事おなりし
人なり其時の御奇をし
そのほくもまれしとゝあみちまく
つきよりのりものうてろを
もきふは
しま
しら

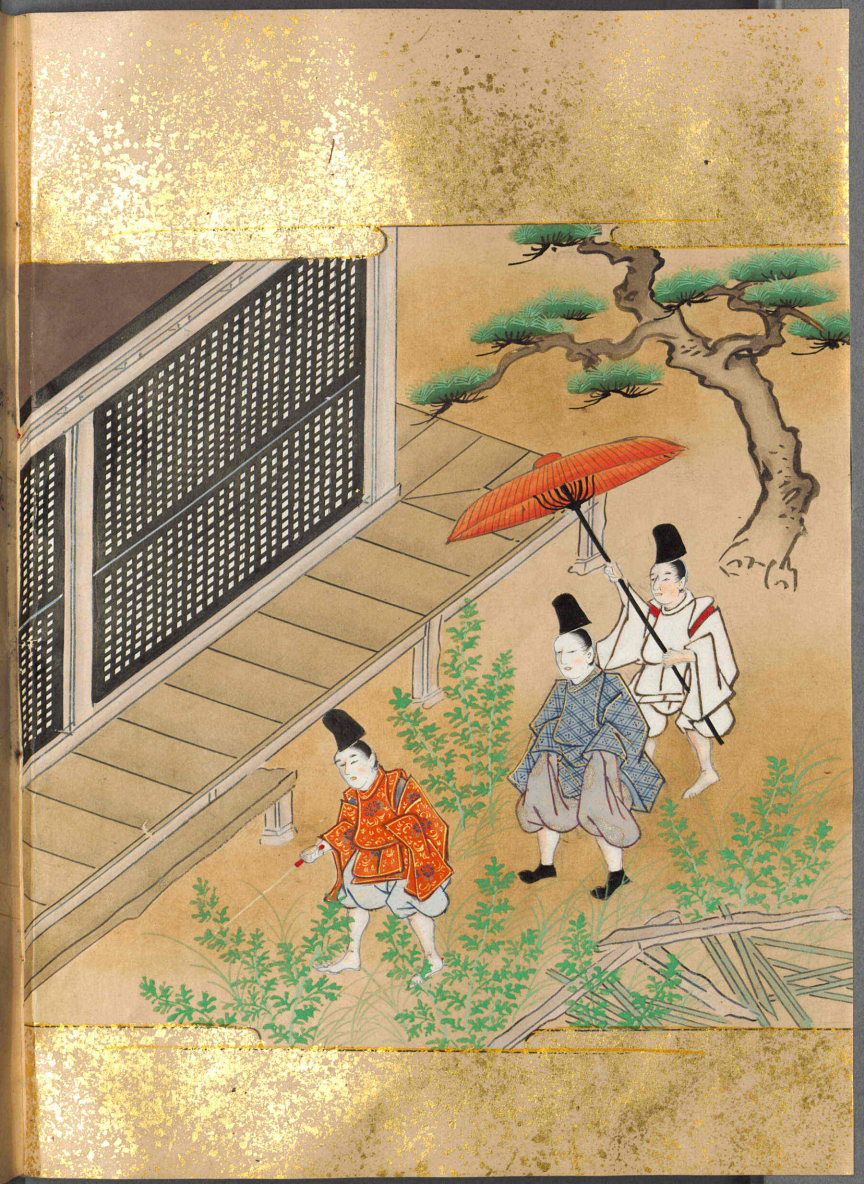
かさ

うくろふ　　あまたろ庫と

きり孫のすまう

なといふまもありけくしこなまもすれ
ぬへしなといふまもありみともふを
ゑつむなとりうつといふまへひて
しそうかんうへしひすゑはむの母房れ
めろとなりしゆゑとてすゑつむよい
ゆきりてけんしなとのみのみくすも
ほとへかましくありしとすゑはむれ

[illegible]めはしたりし人にて大武
よなりて下つきしおりちひそてま
ほりくしも御侍もそしへなる御あり
ほとなれはさそふれあるいとおもひし
ほとよ姫君をうらすくそてまほり
てくれよれくしのおらまてうつをと
しくもら御つるいとうつくしをて九尺
ちりなんをうをれくるんまして
御侍よそひしなりけ事
ふえへし



十二　絵合

此まきをゑあはせといふ事はみかとの御
いまひとねつかの絵をめてさせ給ふ
ひくいてまうしさせてれうしの
と後たりは冷泉院と申人のみかは
ゑりはゝのこの十よりおかしたまふ
ゑをてゝこのかゝよはいとゝ〱
くおもしうゐるにぬよれつ
前のみかの朱雀院よりおほくあつめてゑを
れてしゐきとこゝろつくしの二月はかり

くらゐをさりて いとかたくおもしほ
きさは門のみよには源氏もゆつとし
うらひまり給ふしのあつさひとの院
らく大臣のやうにかりおきさきをとりそめたるか
よ筆しけるのまつりてありけるそてをすゝ門
孫のひめ君こそてんはうひまぎれ
大臣殿のまうとなりちかしのむすめ
とあなりてくをはしの八月よ秋
きおほえこそのきたりよみかんしのみよ
ひめひし伊勢へ文をよこしかへりなる

のさいくうに立のひしもありさ也給
ひくゝんしけさいくうを以子ましさて
まつりく因へまつる也給へとりく八代
おほしまて梅はかと申後まはきされ
まさらまふんりしと給つの以とより
も忠りこのまゝ也のへはたうくうらあつ
めまつる也のふとろ八三月十日ところ有きい
おさのそうもおりしろさはとうきてん
と梅つ御とさうをけうち以忠あるを
てんしと以んありせいまつりてんのひ

ろひさしまに座をしてひて口のにて
まさらせまふ女にさらのにさいくりんは
女房と三人に出されそりんとにさう
そきてさつてりて兵部卿の宮りんを
のにとなとのもんしまふくらくまに
こしまひたり板つかなきはりんしの
にしたり御きあしの二の丸をも
出されそりこれまりひたりからさ
まふさて丸あるせといふ此も御あし
の二の丸は御りおしまし時を

とへなきゆつきくれわまりにゐられ
うえまうしれをしき山れそしも海井を
ゆんのゆくくかきすましの会れな
まりれ君ゆきをうき語へもいくうを
ろうるうんそとへむうさなしき成
んえくけるやうへ此ゆんをもまう物な
うしわまりにひしてこやこへりらく
のかりをひてもむしさきのしうさは
こやそくまつしとけしきまりに出さ
きそりさきはむしさきれこの三のう

らうしつるのこよひしつかなりけると
ゐえへしこはわれならぬこゑの
ようとこゑを給ふるへくはこゑ
きりよわりのらりいまはつれはと
まつるめり
申しゝこ
たり

十三　松風

はまつかぜといふるまんしのあし
まてはんさしあさうしを入るのむしあ
をかりめしくそくなくさりしをれ
らんしをてくのかりをひしをはひめ志
うをそてまつりてとらく月日すきて
三りなりをふおまりよさうひなくなを
それをおかつるく志しくおかりせが
のうちより京へのかりをへとの給へも大
そくのすまれ先をしいむつしと

てかのわしのよれ毋入るのかれうゝ
わかれうゝのまゝりにしるとゝろから
それはそれわかりれ相ともらひらせく
ゆるさむなんとしゆりせる様てのかり
すゝのふしゝろのかゝとゝ心浦
りとてしむとめとつきくのかりさ
まふかうそうハかのうさむとめるお
とてしれ又二三年かゝと神れよのむれ
屋うふりてなしうしつきなしゝそ
てまつるひめ君うしもるきそてま

ばりはるかにうちそれいつのふる
わひをうしてもつるへうしなうり風
さそうしてなりこれをもうらのか
つとうへのくそくはりつてあり井よ
ゆきつるをはそのわうちなきい門か
こすうれはつるうしてつううて
しもはるとうひしきれあうと
うんしのうひしあう都うりうを信
ひうしてとわうてのうんてと
うるふとうりうしうひうう

かとくひらかへまつたちしよ
こしふきされわもそつく
ししゆへなりとのしらし
おはかつきこのことし　まつ風
ねい井川
なこしいつゝとはくへし梅そのは源氏う
つらりの堂といふありしくるまて月よ二
夜念仏なとのさためよりしまうはぬ
てり大井へもまうせ給へ月よ二夜
のゆらさうなとし也わしの上いあか井

ま徒しなり　かつのつめてま源氏のまきせ源ふを　こゝ人かつ
ふしもじとんえたり能くんえなて付ゆ月
り二夜のちさりは大井かつらま付へし
姫君三まて登のかり夕へもひるとのとしやまつ
ゆ大井ま付へし又は夢にふたたり
といふなりこきは秋のころかんしかつ
らへまうてなひてまいのことくおかぬま
おもしまる時まりに夜上人君さらあまさ
小かまりかりのは井てま氣りなれも
みさなとまいりて月ありしろさあさ

つきなきはおもひのふかゐるつきしく
こゝろともをかきのなりつきやりとわ
なをうりしきおきとんゆへうらと
らつくれ末のみさと

ゆえへしこれは
うつるかなかり

付人

十四　薄雲（うすくも）

此うすくも雲の女院と申は故つかの事に
聞く日の宮と申はかんしのきいかしの
ひて無りをまゐる人なり此宮うすくも
といつ事うすくも雲の女院にまさる也
ひて後かんしよそのゝ所
いり日のうすくもまたひくうすくも雲は
おもはりふ袖なり笑やまりふる
此所のんはし聞く日の宮と申しし故
はかのうやそれとあるよはかんしの

ひてこの門をふまうけのひしみと
なきとも西院ゆめまも志り給ひてこと
の外門いとおしまんしてはし十一にて
こ後はくしのまとりはくしまいせんのこと
まはり物
まふは毎に面く日の文も中文より西院
のせんしかうつゝも給ひてめてくし
はし三十七にてくれまふこゝろは三月
の事なり天下徐園（つやおん）なりは門をもしめ
そてまつりくは親（ゐけき）のいろかしとり
まけれんしのはんれうらめりひ面ゆ

あきらのみしさとこともかうく
おにかなけるものかれはまして
ところねむしけれはしなかれ
といはむのはかりもなきらし
てんありはあきのまてかれから
とおもひたるへし
かくさのかへしさくらしんわりは
こゝろのうらはよみあふけ
なかく花よひとりかうちひてなりあ
おふみしれの花すこしえうしはれいかすゝ

いりてゆく日のさしいれて霧
の雲のうちにみなるやうにてうつる袖
の色なりけりひかれいこまひしなり
さてこそうらに雲まれにいはゞ女院
ともうらに雲の女院とやつけそうらさ
まてうす雲にあはいゆつてきの袖凡
多く見えひかりかくるかくて年を
經へ又はゆきりてんふさらし志
まく月日のきしに雲乃かくすま
井まてまかしさなりけりしまて

ほとゝ大屋けもおりしめしなけり
皆をひくほ物をしもほまくにおりし
よは安院のほとらしておとし田をそ
うつ大屋けのほ持僧まく東居にまいり
給ひしり人のさうゐまふかのかんしの
玉れほとしておとし田を一切れ事親
のをんよりおとるゝなきはかやをしる
しめさてほるんしくさを給へはそれ
ゆへりかやりは天下をさやりなしをと
ゆきうを給れいんしとおりかと給さ

思めしてその父をなんしふを申され
そこくろ井よりはき給へとおかせられ
しかともいかさるゆゑんと申てさ
ひよ御心のうちよりいかゝえ給てそれ
のちそ御世も三月まりまうそのほん
のことをりまて此うちよなんし二十九の
御とし夜れうちの君よ院号うちう
せ給て云てうのなんと称こそ

申なれ

十五　槿（あさがほ）

はまはあさがほといふ事なんしの所にて
あさがほの所さいのみんとて武家の文の姫
君かりの所にきまてれたしくかりぬ
さきをひてやんさいのみんとかの所さ
面の所所

こしかりの露口をしまぬあさがほの
これのさうりはとはやしぬるん

とよりんてをそくまつりしゆへにあさがほ
の事といふなりさいのみんかりの所さに

てはしましかものいうさのうちまて
もゆんりけてかかりも給へともわ
かしの御情しさ御思ふなともふくう
とゆしさも給へともはせまゆんはく
てやうまふはりあるなりてハ御かれ乃
りそれ変りてこゝろますうまふ
なりそのことも

あさかか　りそれ

なといつゆるはきへしゆんつよさゆる
あやふくまやうんし事のかるはりさら